現場から

小樽　動きだす駅前再開発

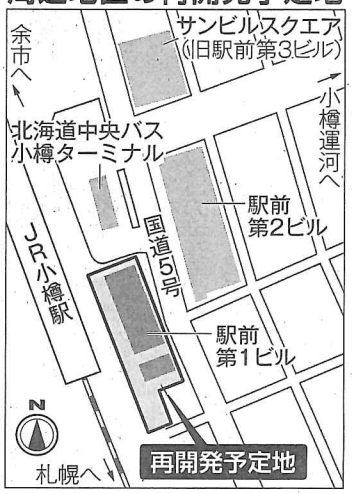
【小樽】ＪＲ小樽駅周辺の再開発が動きだした。駅前第１ビルの地権者らでつくる再開発準備組合が昨年10月に発足、周辺との一体的な整備を目指している。市と連携し、商業や観光の振興、まちなか居住につなげたい考えだ。人口減が進む中、中心市街地活性化の起爆剤となるか。地元関係者の期待は高まっている。（小樽報道部　三坂郁夫）

■人口減と耐震化

第１ビルには書店や喫茶店、病院などが入り、市営住宅は50戸のうち43戸が入居する。再開発に動き始めたのは、小樽の人口がビル完成時の1973年より約７万人減ったことなどで空室率が８％に上がっている上に、震度６強以上の地震で建物が倒壊する恐れがあることが判明したためだ。

一方、人口減少をよそに、小樽の観光客数は年間約790万人（2016年度）と、ビル完成当時の３倍以上に増加。小樽駅の１日平均乗降客数は１万８千人（同）と道内７番目に多く、駅周辺は多くの観光客が行き来する。地元の宿泊施設は「観光客が多い７～８月は部屋が取りにくくなる」（市観光振興室）とされ、第１ビルとその周辺の約４２００平方㍍の再開発について、準備組合はホテルなども想定した活用方法を探っている。山田専務理事は「人が集まる仕組みやどんな機能を持たせるかを議論し、具体的なスケジュールを決めたい」と話す。

市営住宅や病院などが入る小樽駅前第１ビル。再開発の行方に期待が高まっている



官民連携 活性化に期待

■市も横断的議論

焦点の一つが市の関わり方だ。09年に完了した駅前第３ビル周辺地区の再開発では、事業費約66億円のうち国と市が合わせて約14億円を補助した。第１ビルの準備組合の浅村公二理事長は昨年11月、国の補助を受けるのに必要な中心市街地活性化基本計画の策定などを市に求めた。応対した市建設部幹部は「庁内で横断的に議論し、補助を受けられる条件などを情報収集したい」と述べた。

■一体整備も課題

１日約350便が発着する北海道中央バスの小樽ターミナルをはじめ、隣接する駅前広場との一体的な整備も課題だ。現在、鉄道やバスで小樽を訪れる観光客の多くは、小樽駅の正面から小樽運河にまっすぐ延びる市道に流れている。この人の流れを少しでも駅前にとどまらせるには、駅前広場を再開発計画に組み込む必要があるためだ。準備組合はビルへのターミナル機能集約も視野に、中央バスや土地を所有する市などと議論を進めたい考えだ。

小樽商大の大津晶准教授（都市計画）は「人口減少社会では中心部に住宅などを集約すべきだ。市民生活の基盤維持が結果的に観光振興やまちの活性化につながる」と指摘している。

小樽駅前地区市街地再開発　小樽市は1971～76年、ＪＲ小樽駅に近い駅前第１～３ビルを整備する市街地再開発事業を行った。第１ビルは73年に開業し、地下１階地上９階建てで延べ床面積１万3600平方㍍。第１ビルの地権者らでつくる再開発準備組合は昨年10月に発足、第１ビルと周辺を含めた土地で再開発を進めることで一致した。76年開業の第３ビルは2009年にマンションとホテルの複合施設「サンビルスクエア」に建て替えられた。75年開業の第２ビルには長崎屋小樽店などが入る。

読売新聞　30年2月２日（朝刊）

没後85年の多喜二祭

18～20日 小樽で講演や市民劇

プロレタリア作家・小林多喜二（1903～33年）をしのぶ「小樽多喜二祭」が18～20日に小樽市で開かれる。今年で没後85年。市民有志らの実行委員会は、日程を例年より長い3日間にして多くの人々の参加を待つ。

18日は小樽市民センター・マリンホールで午後1時から「記念のつどい」が開かれ、小森陽一・東大教授の記念講演「今、市民として読み直す多喜二」や、老政治家の平和への思いを題材にした市民劇などが行われる。参加費1500円（高校生以下500円）。

19日は同センターで午後1時30分から、小樽商科大の荻野富士夫特任教授が「多喜二は小樽をどう描いたか」と題した講座を開く。

命日の20日は午後1時から、多喜二が眠る奥沢墓地で墓前祭。続いて小樽商科大で、関連資料の見学と同大の高橋純名誉教授の講演「多喜二とロマンロラン」が行われる。当日はJR小樽駅から墓地へ貸し切りバス（往復500円）が運行される。

実行委の大地厳事務局長は「多喜二は『蟹工船』などの作品を20代で書いた。なぜ体を張って書き続けたのかを、若い人たちに知ってほしい」と話している。

19日の講座と20日の見学・講演への参加は、事前に大地さん（080・6099・1815）に申し込む。参加費はいずれも500円。

小樽多喜二祭をPRするチラシ